



海外子女教育振興財団

# 海外子女教育

10  
2014 No.500

特集1 〈500号記念〉  
海外帰国子女教育を  
構想し直す

今月の顔  
塩田周三さん  
ポリゴン・ピクチュアズ代表取締役社長

受け入れ校紹介  
東京インターハイスクール

海外校シリーズ  
コタキナバル日本人学校  
ヨーテポリ補習授業校  
グリーンビル補習授業校

特集2  
私たちの学校選択  
— 学校説明会・相談会  
パネルディスカッション



**DATA**

所在地：〒150-0002  
 東京都渋谷区渋谷1-23-18  
 ワールドイーストビル 4F  
 TEL：03-6427-3450  
 FAX：03-6427-3451  
 URL：http://www.inter-highschool.ne.jp  
 Email：info@inter-highschool.ne.jp/  
 SkypeName：interhighschool  
 交通：渋谷駅から徒歩5分  
 生徒数：100人  
 教員数：15人（うち外国人1人）  
 出願資格：海外・国内の中学校を卒業した者・卒業見込みの者（日本の中3相当から入学可）、高校中退者を含む中学卒業と同等の学力があると認められた者、国内・海外の高校に在籍中の者（年齢上限なし）



インタビューに答えてくれた帰国生たち

「この学校のよいところは、目標に合わせて好きなことを勉強できること。苦手な科目を一気にガッツリやるような学び方もできる。最初はどうかやってみようか迷いましたが、学習コーチのアドバイスが心強かった」  
 日本の学校や補習校に通った経験もあるA君が学習

「いままではバレーと筋トレで友達と遊んだりすることもなかった。大学ではたくさんの人に出会っていろんなことを勉強して、違う世界を見てみたいです」と目を輝かせる。  
 アメリカ・カリフォルニア州で生まれ、十五歳で「日本に来た」というC君（三年目）の目標は映画監督かゲームデザイナーだ。

「本校での学習を通じて、卒業時にはAO入試等で自己推薦できるストーリーをつくってほしいと思います。そこに到達するまでには自己管理をしなければなりません。そのための Learn to Learn のスキルを高めるサポートをするのが、当校の役割です」  
 （取材：文 内村浩介）

単位を認定する。「三年で卒業」という縛りはなく、早ければ二年半程度での卒業も可能。四、五年かけて卒業する生徒もいる。  
**卒業時には「自己推薦できるストーリー」を**  
 早慶上智など、国内の有名私立への進学実績は高い。多くは日本の高校卒業資格を必要としないAO入試、あるいは帰国生入試を利用しての進学だ。海外の大学へ進学する者もいる。高卒認定資格を取得した生徒が一般受験で国立大学に進学することもある。  
 高校卒業間際までアメリカ・ミシガン州にいたA君（一年目）は、国際弁護士を目指して国内の大学からアメリカの大学院に進む夢を抱いている。

で使う言語は日本語が六、英語が四の割合だ。一方、パプアニューギニア、マレーシア、フィジー、オーストラリアと、幼少のころから海外を渡り歩いたBさん（三年目）は、一〇〇パーセント英語で学んでいる。  
 Bさんはオーストラリアでバレーの勉強をしていたが、ケガをしてしまい、ヨーロッパに留学する夢を絶たれて帰国。あらたな道を歩み始めるために東京インターハイスクールに入った。  
 「すごく悩んだ時期もありましたが、学習コーチの支えで大学入試も突破できました」  
 Bさんはこの秋から、リベラルアーツの学部に進む。



提出された成果物の数々

海外子女教育振興財団では、帰国子女を受け入れている学校にも「学校会員」として維持会員に加わっていただいております、この欄で毎回一校ずつ紹介しています。

受け入れ校  
**紹介**  
 学校会員ファイル 139  
**共学**

**東京インターハイスクール**



渋谷校舎で行われている授業の様子

**日本語・英語で学べるインターナショナル通信制高校**

二〇〇〇年に開校したインターナショナル通信制高校。インターネット時代の新しい学びのスタイルを標榜する。アメリカ・ワシントン州の通信制高校「アルジャー・インディペンデンス・ハイスクール」を本校と位置づけていて、同校で行われている「オープン・エデュケーション」を実践している。必要単位を取得すると同校の卒業証書が与えられ、ワシントン州の高校卒業資格が得られる。  
 文部科学省のガイドラインに沿ったカリキュラムに縛られることなく、自由な教育ができるというメリットがある。反面日本の高校卒業資格は得られないが、日本語でも学習できるので、「高等学校卒業程度認定試験」の受験をサポートする体制や、姉妹校である文部科学省傘下の日本の高等学校への

単位繰り越し制度が組まれている。完全単位制で、「課題提出」「自習」「スポーツ・芸術の実践」など学び方も内容も自由。しかも、日本語と英語のどちらを使ってもよい。生徒の六割から七割程度は帰国生・海外生（留学生含む）だ。入試は帰国生であるなしにかかわらず、書類選考（エッセイ含む）と面接によって行う。

**学び方も内容もすべて自分で決める**

日本の通信制高校の場合、一定の日数通学する「スクーリング」が必要だが、東京インターハイスクールの場合は必修ではない。東京・渋谷の校舎では毎日授業が行われているが、対象は首都圏在住の生徒で受講は任意だ。  
 生徒は自分でカリキュラムを立て、単位を取得する。その方法は大きく分けて次の三つだ。  
 (1) 一五〇時間の学習につき一単位。

家での自習、授業への参加、塾に通うのOK。  
 (2) 自分で立てた学習計画を実行する。

(3) 問題集、英検の合格証書、レポート、芸術作品などの成果物を提出する。  
 こうした「自立学習」を支えるのが、マンツーマンで入学してから卒業するまで伴走する「学習コーチ」だ。すべての最終決定は生徒自身がするが、生徒の目標や希望を聞き、同じ目線に立ってアドバイスを送る。

「生徒の自主判断を促すのが学習コーチです。『ああしなさい、こうしなさい』と指示命令するコーチングとは異なります」と、学習コーチのひとり、高橋有希子教務主任は言う。  
 生徒は、インターネットの専用ページで「コントラクト」という学習計画に沿って進行状況を日々報告するとともに、課目ごとに目標を立て、現在の実力とのギャップをどう埋めていくかを事前に考え、段階を踏んで実行していく。試験はなく、コントラクトの達成度などを学習コーチが判定して